ひろば

Vol.115　2010.03.23. 発行
東京工芸大学同窓会
http://www.t-kougei.gr.jp
発行人：田沼　武能
〒164-8678
東京都中野区本町 2-9-5
TEL & FAX　03-5371-2710（事務局）

新同窓会会員の諸君に

乾杯 !!

東京工芸大学同窓会
会長　田沼武能

平成 22 年に学位授与された芸術学部卒業生諸君、おめでとうございます。君たちは、在学中に厚木のキャンパスや中野のキャンパスで、たくさんの思い出をつくり今日を迎えたことでしょう。その中には、楽しい思い出も悲しい思い出もあることと思います。人間はたくさんの思い出を持つ人ほど幸せと言われます。

先日、東京の六本木アカデミーヒルズ 40 で行われた卒業制作展を拝見して、私はすごく感動しました。卒業生諸君が自分の制作した作品に自信を持ち、嬉々として参観者に説明する姿、なによりもその瞳がキラキラと輝いていたことです。おそらく学生生活の中で、一番輝いていた日であったのではないでしょうか。私にもその喜びがひしひしと伝わってきました。生涯の良き思い出として心に残ることでしょう。

さて、諸君たちは卒業すると東京工芸大学芸術学部の同窓会会員になります。会長として大いに歓迎する次第です。

私どもの同窓会は 1926 年、東京写真専門学校の第 1 回卒業生を迎えて発足しました。学校が創立した年に関東大震災があった影響もあり、わずか 17 名でした。その後、幾多の変遷を経て、現在では芸術学部 6 学科で本年 574 名の卒業生を社会に送り出しています。現在、同窓会は全国に 33 の支部があり、各支部を中心に親睦の輪を作り、その集合体が本部になっています。今は、写真学科の卒業生が中心に動いていますが、芸術学部の各学科の卒業生が一緒になって組織を構成していくのが本来の姿と思います。皆様のご協力をお待ちしています。

しかし、新入会員の皆様は、当面社会の一員として自分の仕事に専念しなければならないでしょう。人生に夢を持つことも大切です。やがて仕事にゆとりが出来ましたら、同窓会のことを思い出し活動に参加されることを望みます。

わが母校は、写真・映像を加えたメディア芸術の総合大学として歴史ある大学です。卒業生の誇りとして母校を守り立てていただきたい。母校の発展は、皆様の発展につながるものと思います。そして同窓会の活性化のために、ご協力いただければ幸いです。

卒業にあたって

■写真学科■
浦上富久子

花の芽息吹くこの季節、私たちは卒業します。卒業という言葉のもつ意味がこれほど真摯に感じられる日はないでしょう。それぞれがどんな４年間を過ごしてきたにしろ、こうした節目の瞬間には、自身の中に一個体の生命を感じ得ずにはいられません。

この学校に入学して丸四年が経とうとしています。このような機会を頂き、改めて自身の足跡を振り返ってみようと試みましたが、その実私が得たものはあまりないように感じます。そう言うと大変語弊があるように思われるかも知れません。しかし、流れゆく月日の中で、傍らにあるものがある、それだけの出来事を上手く形容する言葉を私は知りません。今の私は、入学したあの日と寸分変わらぬ両親の愛情や、大学やそれ以前に出会ってきた友人達との友情、また掛け替えのない大切な人との信頼といった、眼には見えなくとも重要な絆に抱かれています。しかしそれらは、意識して手に入れたものではありません。気付けばそこに、私の傍らにあった大切なものです。ですから、自身の学生生活を振り返ってみても、何かを勝ち得たという実感が乏しいのでしょう。ですが、そうした眼に見えぬものの重要性を教えてくれたのは、やはり写真ではないかと思います。写真は眼に見えるものを時に明確に、時に残酷に写しだします。しかし私はこの４年間自ら写真を学ぶことで、そこに写ることのないものの重要性に気付かされました。たとえそれが万人には意味のないものでも、私にとって大切なものを見付ける術を、それに誇りを持つことを教えてくれました。

最後に月並みですが、そうした私の周りにあるもの全てに、感謝を述べたいと思います。本当にありがとうございました。

■映像学科◆
嶽　愛里

元気のでる「可能性のカタマリ」映画が作りたい―。

私たち学生の唯一の売りは「可能性」であると思います。例えば、就職活動などで大した実力差もない私たちを大人が見極める基準は、まさに「可能性」ではないでしょうか。見た人が単純に元気がでる。そんな映画が作りたいと、大学３年時に友人と共に『東京らっせらー』という映画を制作しました。

自主制作映画団体 PoP★C（ぽっぽちゃん☆くらぶ）を設立し３作品目となるこの映画。スタッフは学部も学科も学年も様々です。互いに教え合い、共に学びながら、ものづくりの楽しさを共有しました。この団体を作れたこと、スタッフと出会えたことが大学で１番私を成長させてくれたと思います。そして私の誇りでもあります。映像学科が作る「映画」の枠を超え、芸術×工学の大きな力を実感しました。

大学という場所は教わるのでなく自らが学ぶ場所。本当に学ぶものが多い４年間でした。先生方を始め、友人、先輩、後輩。多くの出会いが私の「可能性」を伸ばしてくれました。４年間で得たものを糧に、見守ってくれた両親と全ての出会いに感謝し、卒業後も自らの「可能性」を伸ばしていこうと思います。

『東京らっせらー』という映画の主人公、青山ゆかりは何にでも首を突っ込むお人好しな18歳の女の子。モットーは「考える前に、走れ」である。自分では気付かないうちに、事件に巻き込まれ、可能性を自ら潰そうとしている出会った登場人物を救ってしまっているのだ。この物語のゆかりの様に私の大学生活、決して楽なことばかりではなかった。けれど、それでも私は、走り続けるのだ。

■デザイン学科 VC■
高瀬佳容子

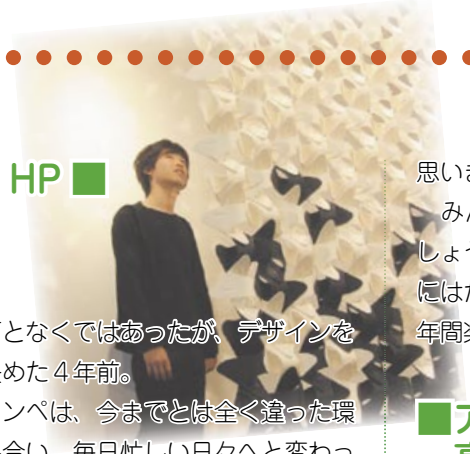
きっかけは、彼氏にフラれた事でした。

心の支えと存在意義を失い、女として枯れ、これと言った長所もない、どうしようもない人間だと思いました。そこで危機感を感じたのか、私は「人生をダサく過ごさない計画」を始めました。

とにかくすごい人間になる！一流になる！だけが目標で、デザインは後からついてきました、とは言いつつデザインは根本的に好きでしたが。大好きな物や人は、いつかは壊れたり、いなくなったりします。絶対的ではありません。しかし、デザインは自分がそれを追求する限り応えてくれる絶対的な存在でした。生涯そこに力を注いで生きていく事に確信を得て、猛進する私に拍車をかけてくれたのが工芸大の先生でした。（まさかきっかけは言えませんでしたが）教師と生徒というより師匠と弟子。熱い指導の元、私は念願の広告会社に受かりました。

とにかく猛進する私は一刻も早く卒業をしたいです。新しい道は開けた、次は第二ラウンドだ！こんな熱い道へ導いてくれた先生、家族、友達には、感謝の言葉よりも、これからの実績で恩返しをしたいと思います。

■デザイン学科 HP ■
中林大昂



モノづくりが好きで何となくではあったが、デザインを学びたいと思い入学を決めた４年前。

入学早々に参加したコンペは、今までとは全く違った環境で育った仲間と刺激し合い、毎日忙しい日々へと変わっていった。それと同じくして、私の中でのデザインの考えも洗練されていき、新しいモノを考え生むことの喜びを知り、デザインへの飽くなき探求心が芽生えた。

それからは、興味のあるデザイン活動には出来る限り参加していったのは自然な流れだった。初めは課題の合間を縫って出品していたコンペだったが、それこそ学校よりも課外活動で目紛しく動き回っていた記憶だけが残っている時期もあるほど没頭していった。そんな４年間の学生生活も何時しか終わろうとしていた。今にしてみれば忙しいピーク時のデザインは完成度も高く、それを発表することで評価が次へのエネルギーや自信となり、とても心地よい疲労感に私は満たされてにいたのだと思う。

今日まで経験してきたことは他では味わえなかったと確信していると共に、間違いなく私を成長させてくれたと思う。

それは、ORANGE という HOME が無ければ私はこんなにも楽しく充実した生活を送れな かったと思うからだ。これからまた新たな道へと進んでいくが、今後もデザインには貪欲に更なる成長をしていきたいと考えている。

■メディアアート表現学科■
中根清子

隣に座った男子にそわそわしながらあいさつした入学式。それから今日までの４年間はとにかく自由な毎日でした。

大学生活を振り返って思うことは、学科内だけでも自分とは違った分野で活動している人がたくさんいたということです。特に、インタラクティブアートの分野は顕著なもので映像デザインを専攻していたわたしにとっては、友人の作品がどのような仕組みで制作されているのか正直、理解できないこともありました。つまり、学びたいという意志があれば自分の目指す方向性を思い通りに選択できるということなのです。同時に、それは自主性が問われるものであり、自分自身によって成し遂げていかなければならないものでもありました。この３号館で過ごした日々はお互いが競い合い、切磋琢磨できた期間だったのではないかと思います。

みんなは卒業という今日この日に何を思い起こすのでしょう。一人一人回想することは違うけれど、きっとそこにはたくさんの友人の姿があるのではないでしょうか。４年間楽しく過ごすことができました。みんなありがとう。

■アニメーション学科■
高士亜衣

「絶対に夢を叶えてやるぞ」と意気込んで入学試験に臨んだのは、もう４年も前のこと。それは、自分で決めた道を歩むということは決してただの“自由”ではないということを、実感する日々の幕開けでした。

アニメーション学科へ入学する前から、“アニメーションは総合芸術だ”という言葉をよく耳にしてきました。志望大学への入学に胸を踊らせたのも束の間、正にその言葉の通りただ絵を描くことが好きでは通用しない世界が待っていました。人に見せる作品を作るという、今まで感じたことのない重圧。一方には両親からのサポートの元、勉強をさせて頂いているという責任。それは挑戦や苦悩の日々の始まりと同時に、新たな世界への入り口でもありました。そして様々なことと改めて向き合うことで、発見と経験の喜びに沢山出会うことができました。

４年間の集大成である卒業制作を自分が納得できる形で終えることができた今、社会への一歩を踏み出す勇気を与えてくれたもの、それこそが正に大学という環境だったのだと、改めて実感しております。そして私がここにいられたことは、決して当たり前ではなく、周りの方々のサポートがあって初めて得ることのできた、正に奇跡なのだと気付き、感謝の気持ちでいっぱいです。

卒業の日が迫れば迫るほど、もっともっと勉強がしたい、この大学が心の底から大好きだという気持ちが溢れてきました。

大切で掛け替えのない環境を私達に提供して下さる職員の方々、困った時はいつでも手を差し伸べ、先へ先へと導いてくださる先生方、辛い時に共に支えあい、楽しい時に思いっきり笑いあった４期生の皆、どんな時でも助けてくれた両親に、心から感謝の気持ちでいっぱいです。春からは念願叶ってスタジオジブリに就職し、アニメーターとして作品制作に関わることになりました。新たな夢と共に、今再びスタートラインに立っています。

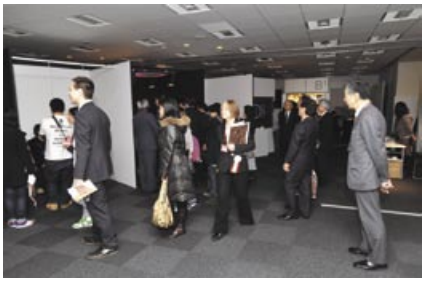
４年間、本当にありがとうございました。そしてこれからは同じ芸術世界の一員として、よろしくお願いいたします。

芸術学部卒業・大学院修了 制作展 2010

来場者数は3日間で5825人!! ー 大盛況のうちに終了しました ー

2010年2月19日～21日の３日間にわたり、六本木アカデミーヒルズ40階（六本木ヒルズ内）で『東京工芸大学芸術学部卒業・大学院修了制作展2010』が開催された。

開場に先立ちオープニングセレモニーでは、テープカットが行われ、田邊順子実行委員長（メディアアート表現学科教授）により、高らかに開会が宣言され2010年卒業制作展が開幕。会場内は、今春卒業を控える5学科と、大学院を修了する約540名の作品が華やかに来場者を迎えた。そして、時間を追うごとに来場者が増え、出迎える学生や大学教職員も慌ただしく動き活気に包まれた。



写真学科

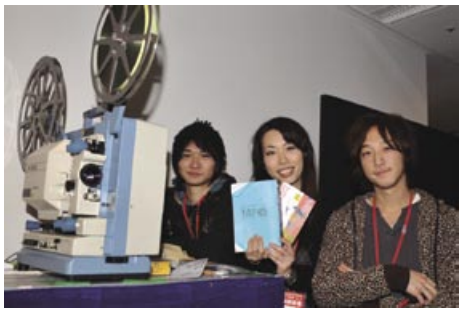
Department of Photography

今年もクオリティーが高い写真学科

各人に与えられた展示スペースは240cm×180cm。大伸ばし1枚で自分の世界を表現する者、複数の写真を強弱使いながら展示する者、花を配置しスペース全体で自己表現する者。学生の自由な発想に驚かされる。そして作品の近くにはブックが用意されており、さらに作者の世界観を見ることができる。写真教育の歴史と伝統は今も受け継がれている事を実感した。

映像学科

Department of Imaging Art



仲間との共同作業で作る映像制作、枠にとらわれない自由な表現方法に圧倒

ボロボロになった台本や、編集で使わなかったフィルムが上映会場の片隅に展示されていた。各人が持ち寄った企画やシナリオを選ぶのもひと苦労だったようだ。撮影、照明、出演、演出、編集など各人がやるべき仕事をやりきった充実感に満ちていた。

また、映像だけにとどまらず、廃品を使い新しい世界を創造した学生、映像上映イベントプロデュースを実際に行い、その過程と結果を卒業制作にした学生、すでに監督作品を製作しデビューを控えている学生など、実力と行動力に驚かされた。

デザイン学科VC

Department of Design ビジュアルコミュニケーションコース

ユニークな発想力は社会を豊かにする

各人のモチーフは様々。自己の創造世界と向き合い、挫折からの立ち上がりを1枚のキャンバスに描き上げた学生や、落書きから次なるアイデアを見い出す学生、料理店の外装をプロデュースした学生たちなど若く力強いエネルギーを感じた。直感的発想を裏支えするかのように、制作理論を自分の言葉で説明をしてくれる学生が多く感心してしまった。

デザイン学科HP

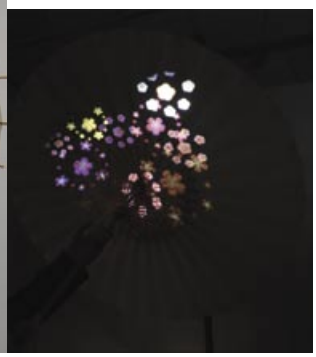
Department of Design ヒューマンプロダクトコース

生活に密着した実用的で完成度の高い作品がずらり

日々の生活と直結した椅子や間仕切り、照明器具、棚などが存在感を示していた。慌ただしい日常の中に、潤いや安らぎを与えてくれるのもデザインの力だろう。身近な素材と新しい素材の融和を模索し続けた作品や、自分の部屋に置きたいソファーを制作した学生など多才な想像力に驚かされる。

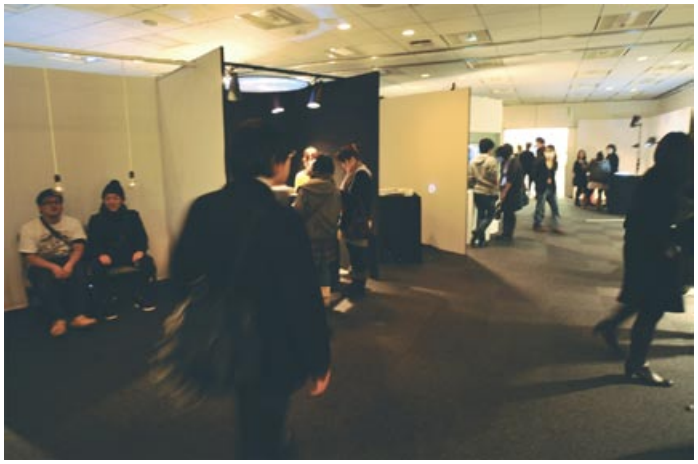
メディアアート表現学科

Department of Media Art



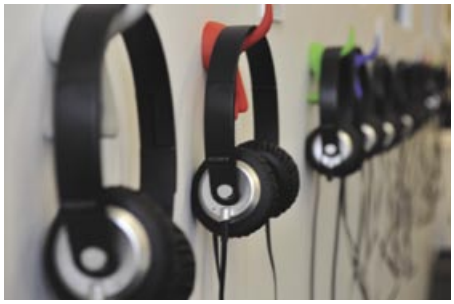
来場者参加型で新たなコミュニケーションツールとなるアート

センサーやプログラミングなどデジタル技術を駆使したアートを実際に体験する。半年を要して制作した自分の作品を介して、来場者同士がコミュニケーションを取る様子をみて感動したと、ある学生は嬉しそうに話をしていた。またある来場者は「いま目にしている作品のいくつかは、このまま世に出て行っても何の問題もない」とそのコーナーから動かなかった。



アニメーション学科

Department of Animation



制作者の世界観へ瞬時に引き込まれる

複数のモニターとヘッドホンが準備され、心ゆくまで作品を観賞できる。作者の思いが詰まったアニメーションを、幼児が楽しそうに画面を食い入るように見ていたのが印象的だった。また会場内にはゲームコースの学生が制作をしたゲームを実際に遊ぶことができ、中にはしばらくの間コーナーから動かない来場者もいた。

取材雑感

卒業制作展の会場内は熱気に溢れていた。まだ未知数だが若く無限な才能を持った学生たちにとって、社会に出ていく直前の大学生活集大成。自分の言葉で作品を語り、熱い思いを真剣に伝えてくれる。卒業制作展で出会った全ての学生たちがクリエイターとして華をひらかれる事を心から願います。

写真・文／池谷彩子（73期）　デザイン／ROUinc.

2009 フォックス・タルボット賞

フォックス･タルボット賞は、写真表現をめざす若い人々への奨励と新しい写真家への登竜門として、ネガ・ポジ・プロセスの発明者で近代写真の父としてのウィリアム・ヘンリー・フォックス・タルボット氏（英 1800 ～ 1877）の偉業をたたえ、イギリスのフォックス・タルボット美術館のご協力を得て、1979 年に東京工芸大学が設けました。

2009 年度は応募者 60 名、作品数 84 点の中から入選作品が決定し、10 月 31 日の表彰式当日は、写大ギャラリーのリニューアルオープニングセレモニーも盛大に行われました。

テープカット

第一席受賞者の伊藤真吾さんと
作品『NO EXCUSE』
（芸術学部写真学科2008 年卒）

第一席	NO EXCUSE	伊藤　真吾	芸術学部写真学科 2008 年卒
第二席	broader view	小池　裕也	芸術学部写真学科４年
第三席	ランドマーク	藤原　　宏	芸術学部写真学科研究生
佳　作	葬儀の日	田中　宏志	芸術学部写真学科 2008 年卒
佳　作	狭間	前島　聡夫	大学院芸術学研究科・修１年
佳　作	郷里	別府　　笑	大学院芸術学研究科・修２年
佳　作	The Americans ～偉大なるスターの死の裏側に見たアメリカ人達～	川島　崇志	大学院芸術学研究科・修１年
佳　作	明暗	田村　　翔	芸術学部写真学科１年
モノクロ賞	空中をとびかけること	久保　一平	芸術学部写真学科４年
審査委員長　田沼武能			
審 査 委 員　細江英公　中谷吉隆　立木義浩　森山大道			

Congratulations

講評

表彰式での集合写真

関西支部　双美会
京都に集う！
平成21 年11 月6 日

関西支部同窓会は昭和８年に「吾人会」の名称で結成され、その後「ひまわり春秋会」の名を経て 24 年に、関西支部同窓会として今日に至っておりますが､夫婦で集う「双美会」は、支部組織のなかにあって有志の呼びかけで、昭和 34 年結成、翌年 2 月 20 日に京都に集い第 1 回目の会合が催されました。

この程、創立 50 周年を迎えるに当たり、世話役を務める福岡武雄氏（31 期）の企画で双美会：例会は物故者法要と精進料理で故人を偲びました。

快晴に恵まれた 11 月 6 日、臨済宗妙心寺派総本山・塔頭「衡梅院」にて、院主東海元昭導師のもと故人 37 霊の追善供養がおごそかに執り行われ、院主の丁重な法話を拝聴し、加えるに写真に携わる私たちにとって意義深い「揮毫」の色紙“明歴々露堂々”をしたためて戴き、滞りなく終了。そのあと院主様のご厚意により本山の法堂、庭園、塔頭等を拝観する。

続いて懇親会は妙心寺御用達・精進料理の“阿じろ”で故人を偲びながら、和やかなうちに歓談のひと時を過ごし、親睦を深めました。

序でながら「双美会」の発祥の経緯をひも解きますと本学第 1 期生の大山有恒先輩が、昭和 24 年に関西支部同窓会を再興し、その 10 年後の 34 年に京都鷹峰の「然林房」にて東京写真大学同窓会全国大会と銘打ち、本学学長・鎌田彌寿治先生、江頭春樹教授の喜寿記念を兼ねて催され、全国から 80 余名の参加があり、一泊二日の大会は盛大に挙行されました。なお大会の記録写真はコロタイプ印刷で纏められアルバムが刊行されました。

この大会の成功裡が動機となり、関西支部活動の充実化と併せて、奥様方の日常の労をねぎらう夫婦同伴での親睦会を･･･と、大山先輩の音頭とりで「双美会」が発足しています。

双美会の活動は年に 2 回､春と秋に開催され京都の寺社、名所旧跡を中心に近畿各地を巡り料理に舌鼓しながら親睦交流を深め今日に至っております。

ただ、この 10 数年を振り返りますに、出席者の人数は減少傾向にあり、例会は年に 1 回となり些か淋しく、変遷する社会現象に痛感いたすとともに、往年の賑わいが夢のようでもあります。

それはともあれ、今回の双美会 50 周年の企画：物故者法要が恙なく営まれたことを期して、記念誌：“双美会 50 年の歩み”を写真と寄稿文で「アルバム」に綴るべく、ダイコロ株式会社（42 期 駕田 毅氏：会長）のご支援・ご協力を得て、世話役福岡武雄氏を中心に進めている次第です。

大学は大規模に発展し何より喜びとするところですが年代の断層は、なかなか交流の親密化が厳しい最近の状況です。この企画を纏めるにあたり本学 80 年の同窓会の記録に鑑み、何時までも関西支部とともに「双美会」の発展あることを念願している次第です。

山本吉男（24 期）

双美会　「物故者法要」　平成 21 年 11 月 6 日
妙心寺　衡梅院

双美会　親睦会　平成 21 年 11 月 6 日
『精進料理　阿じろ』

『旅の30会』
広島/宮島に集う

いよいよ待ちに待った同窓会の日がやって来ました。

今年（2010年）は卒業55年目となります。

そして、～30期卒『旅の30会』～が今回で12回目、干支で言えば一巡りしました。

昨年（2009年）4月に「ご当地ソング」として“水森かおり”が発表して年末の紅白でも唄い好評だった『安芸の宮島』で、秋色真っ只中の2009年11月11日と12日の二日間、13名が集いました。

幹事は「ご当地」の風呂田君と「名マネージャー」の福岡君です。

JR広島駅で集合場所の宮島口へ乗り継ぐ在来線の電車に偶然、新潟・関東・中京・関西組が乗り合わせ最早、学生気分に浸りながら一路、宮島口へと向かいました。

定刻に一年振りの懐かしい面々が揃い早速名物の「あなご丼」を、たいらげてからフェリーに乗って『宮島』に出発です。朱塗りの『大鳥居』と荘厳な『厳島神社』に迎えられ今夜、宿泊する“宮島潮湯天然温泉・湯元”「 錦水館」に手荷物を置き《日本三景》の一つ『厳島神社』を拝観しました。【国宝・重要文化財】であり、1996年に【世界文化遺産】にも登録された『厳島神社』は1168年に平清盛が造営したものです。スケールの大きな鮮やかな朱塗りの優美な、各神社と能舞台等が海の中を回廊で結ばれ正面に『大鳥居』を配し、それらが夕日に映えた美しさに私達は息を呑み「芸術写真・スナップ写真・記念写真」等々自信！過信？の腕前でシャッターを切りました。掲載の記念写真〈全員〉は神社回廊から【国宝・重文】の『五重の塔』をバックに写した写真です。

「錦水館」に戻り当館ご自慢の“掛け流しの温泉と食”を楽しむ時間です。瀬戸内海の潮の香りに包まれて“はんなり”とした塩味のする温泉で身体を温めて宴会場「吉祥の間」に集まりました。

和やかな雰囲気の中で順番に近況や同僚の消息を語りました。

写真から離れない人、写真以外の趣味に浸っている人等々、今回も参加者全員元気で顔を合わせられた事を喜びあいました。板前の腕に縒りをかけた瀬戸内海の旬の味覚と、ご当地の銘酒「加茂鶴」で豪華な宴会を堪能して、二次会に移りました。

私達は、やっぱり「蛙の子は蛙」ですね！話題は最近の写真事情です。デジタル化にアレルギーを少なからず持っている私達世代には大きな関心事です。立場によって、客観的に分析する人、アナログに若き良き時代を重ね合わす人、現在の創作活動のなかで苦労している人、小日向君から差し入れの鹿児島の銘焼酎“てんからもん”の心地よい酔いも手伝いアナログとデジタルの良さを比較して議論沸騰しました。

全員新しい時代に成りつつある事を認めつつも、しみじみ哀愁を感じた議論でしたが卒業して55年目になり八十歳に近いながら、若々しい雰囲気が部屋一杯で幸せな一刻でした。

翌朝、朝霞に浮かぶ赤鳥居を目前に二日目の朝を迎えました。今日は標高535㍍の【世界遺産】『弥山』に登ります。朝風呂を浴びて又、大広間で地元の素材をふんだんに活用

「旅の30会」　平成21年11月11日
宮島（広島県）
後列左から　松本、福岡、曽根、貝塚、小林、小日向、古屋、大澤
前列左から　風呂田、加藤、猪野、藤森

広島　宮島「錦水館」にて　平成21年11月11日
後列左から　貝塚、小林、河相、曽根
前列左から　松本、加藤、大澤、古屋、小日向、藤森、猪野、風呂田、福岡

した松花堂始め七品の朝食を頂き出発です。紅葉の一大名所の「もみじ谷公園」で燃える様な紅葉と楓を愛でて「紅葉谷駅」からロープウェーに乗り「驚異の空中散歩」をして瀬戸内海や弥山原始林の絶景を上空から眺望しました。

ロープウェーを乗り継ぎ「弥山展望台」から360。大パノラマから瀬戸内海の島々を望遠して美しい瀬戸内海と「神の島」宮島の神話や神秘的な景観に全員、圧倒されながらシャッターを押していました。幸い、時間が経つにつれて太陽の光が射してきて、きっと後世に残る傑作が生まれる事でしょう！

♪♭安芸の宮島　弥山に立てば　瀬戸は引き潮♪♭！

のご当地ソングを口ずさみながら『安芸の宮島』を後にしました。

世話役の風呂田、福岡両君の尽力と全員の協力で無事に楽しく過ごし、又の再会を誓い次回に引き継ぐ事が出来ました。次回の今年（2010年）は小日向君の肝入りで新緑の頃、伊豆長岡温泉で13回目の～30期卒『旅の30会』～を行う予定です。

今回ご都合悪く残念ながら参加出来なかった＜工業科＞卒業の方々はじめ、中野の煙突で結ばれた30期の＜技術科・印刷科＞の諸兄姉にも門戸を大きく開いていますので此の記事をご覧になったら今から早速、近隣の同窓生と連絡を取りあって伊豆長岡温泉でお会いしましょう！

何しろ先が知れているんだから？

記：松本一馬（30期）

34期・写真工業科・同期会 平成21年12月12日

昭和34年3月の卒業組も全員が70歳台を迎えた中で、恒例の写真工業科同期会を、昨年12月12日（土）に東京で実施しました。

今回は、大友重明・本間夏生の両氏が幹事となり、最近若者に人気の出ている赤坂TBS隣接の和食店「DO-ZO」での開催となりました。

昨年は、常連の2人を病気で失うという哀しい出来ごともありましたが、集まればやはり親しい仲間だけに、短い時間とはもうせ総勢14人が再開を喜び、楽しいひと時を過しました。

なお、次回は本年12月11日（土）、昼食の時間帯に、都内で開催の予定です。

記：川名晴美（34期）

写真工業科　第34期クラス会
赤坂DO－ZO　平成21年12月12日

参考

大学HPアドレス　http://www.t-kougei.ac.jp
入試相談受付（入試センター）　TEL.0120-12-5246
同窓会事務局（総務）TEL.03-5371-2710
ひろば・同窓会・広報へのメールアドレス（受信専用）dousoukai@t-kougei.gr.jp
住所変更は、同窓会ホームページでも出来ます。　http://t-kougei.gr.jp/
ひろば原稿の送付先　東京工芸大学芸術学部同窓会・広報担当　福村敏あて
ひろば原稿以外の各種連絡先　東京工芸大学芸術学部同窓会　本部あて

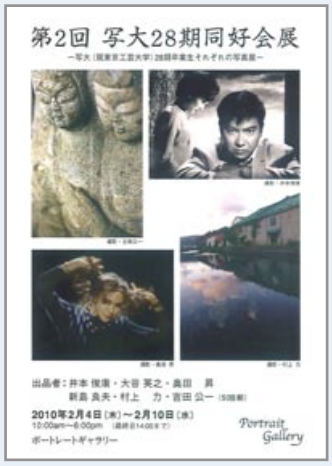
写大ギャラリー展示案内

塚原琢哉写真展
廃墟の重工業地帯「シレジア」
2010 年２月 16 日（火）～３月 31 日（水）
午前 10 時～午後８時
場所：写大ギャラリー
　　中野区本町 2-4-7　芸術情報館２F
　　TEL.03-3372-1321
主催：東京工芸大学芸術学部
後援：駐日ポーランド共和国大使館

荒川好夫写真展
北海道　冬
上記機関車 C62 栄光の記録
2010 年３月 19 日（金）～ 25 日（木）
午前 10 時～午後７時（最終日は午後２時まで）
場所：富士フイルムフォトサロン
　　東京都港区赤坂 9-7-3
　　フジフイルム　スクエア２F
　　TEL.03-6271-3351　　**荒川好夫（42 期）**

飯田照明　写真展
ウシオーラセー《沖縄闘牛パラダイス》
期間；2010 年２月 18 日（木）～２月 24 日（水）
会場；アイデムフォトギャラリー「シリウス」
写真展内容
　沖縄闘牛は、スペインの闘牛のように人と牛が戦うものではなく、１トン前後の牛と牛の戦いです。沖縄では闘牛のことを方言で「ウシオーラセー」と言います。
飯田照明（55 期）

山下晃伸写真展
エプラシトギャラリー　スポットライト対象展
moving　still　life　～公園の夜に見えたもの～
2010 年３月 26 日（金）～４月８日（木）　日曜日休館
午前 10:30 ～ 18:00（最終日は 15:00 まで）
場所：エプソンイメージングギャラリーエプサイト
　　東京都新宿区西新宿 2-1-1　新宿三井ビル１F
　　TEL.03-3345-9881
山下晃伸
（東京工芸大学大学院芸術学研究科博士課程在籍）



写真左/ 案内状。　中央/2 月9 日東京プリンスホテルにて祝賀会。
右/ 昨秋叙勲された27 期、植村泰三氏。

第２回　写大 28 期同好会展　ー写大（現東京工芸大学）28 期卒業生ー
2010 年２月４日（木）～ 10 日（水）
場所：ポートレートギャラリー
　　新宿区四谷 1-7　日本写真会館５F
（28 期　出品者：井本俊康・大谷英之・奥田　昇・新島良夫・村上　力・吉田公一）

中野キャンパス・リニューアル！
第１期工事、着々と進む!!

2010 年 1 月末には地下 1 階までの型枠解体が行われ、地下の躯体は出来ました。校舎は 1 月末現在で約 30% の出来ですが、3 月始めには 2 階部分の養生が行われています。現在進行中の 1 期工事の完成予定は 2010 年 7 月末です。また第 2 キャンパスの工事も間もなく始まります。

本館からの新宿のビル街

1 期工事の校舎が完成の折には、本館からは、情報館をはじめ、新宿のビル街は見られなくなります。

写真と文：福村　敏（45 期）

（写真左：1 月 22 日撮影）
1 階の配筋工事。左側の校舎は3 号館、正面は写大スタジオです。
（写真右：2 月 4 日撮影）
2 階の床部分にコーンクリートを流し込む作業が行われました。

訃　報　（敬称略）

岩　田　進太郎（12 期・写真芸術科卒）
高　橋　琢　二（16 期・写真芸術科卒）
近　藤　孝太郎（18 期・写真理学科卒）
高　崎　宏　三（19 期・写真理学科卒）
石　津　康　行（20 期・写真芸術科卒）
斉藤（久富）耕一（23 期・写真技術科卒）
山　口　義　弘（27 期・写真技術科卒）
高　岩　　仁（32 期・写真技術科卒）
青　柳　孝　行（35 期・写真芸術科卒）
川崎（片渕）漠子（36 期・写真技術科卒）
青　柳　達　男（37 期・写真工業科卒）
鳥　海　明　彦（37 期・写真工業科卒）
木　村　　徹（42 期・写真技術科卒）
松　村　加奈子（54 期・画像技術科卒）
宇佐美　栄　一（63 期・写真技術科卒）

編集後記

今号で始めて、「ひろば」をカラー版に、レイアウトはデザイナーに依頼いたしました。
私は 1 月初めからノルディック・ウォーキングを始めました。2 本のポールで身体を力強く押してさっそうと歩いております（2 本の杖でよたよたと？）。
30 分ほど歩くだけで汗（冷や汗？）をかくほど全身運動になり、メタボ解消になればと続けております。
「ひろば」も、私もスリムにスマートになったと感じていただければ幸いです。

広報委員 HP 担当：木村政夫（38 期）